サミュエル・ヘーズレット著『日本の監獄から』（本誌第八号掲載）正誤および「訳注」・「補遺」追記

松平 信久

はじめに

標記翻訳を掲載後、読者の方による指摘などから、本文および訳注、補遺などの記述に誤記や不正確な記述のあることが判明した。また、掲載時点では分からなかった事実を関係者の方からご教示いただいたり、筆者の調べで新たな補足事項が生じたりした。そこで、それらをまとめてここに報告させていただく次第である。なお記述中のページは第八号のものである。

Ⅰ．「訳文」正誤

1．獄中での読み物の最初の入手時期について

（80ページ下段後ろから5行目）

六ヶ月目（誤）　→　六週間目（正）

Ⅱ．「まえがき」および「補遺」正誤

1．ヘーズレット主教の監獄からの釈放時期

（63ページ上段　最終行）

一九四七年の四月（誤）→ 一九四二年の四月（正）

2．サンスベリー司祭の帰国後の勤務校について

（115ページ下段　2行目）

聖オーガスティン新学校（誤）→

聖オーガスティン神学校（正）

3．P．ラッシュ氏の階級について

（115ページ下段 9行目）

米国陸軍大佐（誤）→ 米国陸軍中佐（正）

Ⅲ．「訳注」修正

1．ヘーズレット主教の横浜移転に伴う主教座聖堂および、地方部監督事務所（教務所）、主教邸の設置について

（95ページ下段　注（2））

主教座を横浜聖アンデレ教会に移し、同時に主教邸も

建築されたとのことである。（旧）

←

主教座を横浜聖アンデレ教会（横浜市中区花崎町一丁目四二番地）に移し、同時に、地方部監督事務所（教務所）を同教会内に設置した。更に、横浜市中区山手町二二〇番地に主教邸が設けられた。（修正）

Ⅳ．「訳注」および「補遺」補足

1．本書の増刷について

（112ページ下段 訳者による補遺2）

その後、訳者の確認できたところでは、更に、一九四三年八月には第三版、同年一二月には、第四版が、ロンドンの学生キリスト教運動出版社から刊行されている。

2．第一次大戦中における、ヘーズレット師の欧州での活動について

標記について、原著にある筆者紹介（64ページ「ヘーズレット主教に関する覚書」）の中に、「一九一四年から一八年におよぶ戦争の間、フランスの中国人労働者組合で三年間勤務した」との記述がある。この点に関して、主教自らの筆によると思われる次の文章が筆者の目に留まった。

「◎戦線に向はんとして

現代思想家の深き注意は、今や挙って世界的大動乱の上に注がれつゝあり。然れど十字架の主に従ふ、我等の態度は既に明なり。我等は如何に世人を指導すべきや。十字架の主、死して甦れる基督を除きて我等何処にか真に人類の趨帰を覓（もと）（ルビは引用者による）むべき。然り、今や余は戦線さして進みゆかんとす。諸君は留まりて日本の堅めとなるべし。十字架の主は我等の希望にして、又我等の指導者たるなり。

――S．Heaslett　」

（聖公会神学院校友会機関誌『陵友』第一号（大正七年三月廿日発行）に掲載。『聖公会神学院100年記念誌』（聖公会神学院　二〇一一年一〇月二九日発行）所収）

この記事が掲載された大正七年（一九一八年）の末には第一次世界大戦は終結した。従ってヘーズット師のフランスでの活動は、大戦末期から戦後にかけてであったことが推測できる。当地での滞在が三年間であったとすれば、同師の主教就任（一九二二年）は日本への帰還後間もない時期であった。引用した文章からは、神学教育に携っていた同師が、その立場から（一時的にせよ）離れて、戦線でキリストの道に従お

うとする高揚した意思を強く感じさせられる。

3．ロイヤル・アルバート・ホールにおける日本の中国爆撃に対する抗議集会について

（96ページ　訳註15）

一九三二年にロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで開かれた日本の中国爆撃に対する抗議集会は、日本聖公会内部にも波紋を広げたようである。当時聖公会神学院でギリシャ語、聖書神学担当の教授であった、C．K．サンスベリー師の長女、オードリー・サンスベリー・トークス氏の著書「二つの日本」（Audrey Sansbury Talks; A Story of Two Japans）には、以下の様な記述がある。

「一九三七年の秋は神学院での仕事はことのほか順調に進み、学生達は外国人教授のもとで真剣に学んだ。（しかし）彼らの本当の気持ちは知ることが難しい。一〇月五日にロンドンで、日本での反英感情を引き起こす行事が催された。この催しは、中国で一般人を標的にした爆撃が行われたことに関して日本に抗議する為にロイヤル・アルバート・ホールで開かれたもので、集会ではカンタベリー大主教が議長を務めた。この集会は日本の新聞では「反日」と書かれ、イギリスが中国の主張を支持し、中国での日本の要求を嫌っている証拠だと強調された。大主教が関わりを持ったことは、日本聖公会内に、より荒い言葉を生み出させていた。東京の松井主教は、「これでイギリスの教会と我々との繋がりは終りだ」と語気を荒げた。ヘーズレット主教は「私たち英国人宣教師は皆さんを支えるためにだけここにいるのです。皆さんがお望みであればすぐに去ります」と言ってこの雰囲気を静めた。

4．交換船について

（102ページ上段　注（4））

（1）日英民間人交換船のうち、イギリス側の交換船の状況は以下の通りであった。

船名・エル・ナイル号（エジプト船籍）

運行日程

☭一九四二年　七月二九日・リバプール出港
　　↓リスボン寄港

☭一九四二年八月三一日・ロレンソ・マルケス入港

☭一九四二年九月八日・ロレンソ・マルケス出港

☭一九四二年一〇月九日・リバプール帰港

従ってヘーズレット主教は、日本側の交換船龍田丸でロレンソ・マルケスに到着（八月末日）の後、当然この船に乗って母国に向かったものと考えられる。横浜出港後二ヶ月余りを要しての帰国であった。

（2）吉村昭氏の小説『深海の使者』（文春文庫二〇一一年三月　新装版第一刷　文芸春秋刊）によれば、「一九四三年の秋、ドイツに渡航後、帰国の途につき、連合国側の制海区域を潜り抜けて必死の航行を続ける日本の伊号八潜水艦は、アフリカ南端喜望峰を大きく迂回して航海中、一一月八日の朝、一隻の客船とすれ違う形で遭遇した。この船に関して、数日後に、ドイツ駐在海軍武官代理渓口泰麿中佐から同潜水艦に、『日英居留民交換船（船名解読できず。スウェーデン船）ハ、目下ケープタウン方面ヲ航行中ノハズナリ』とする電報が入り、その客船が交換船であることが分かった」（大意）とある。しかし、航海日程からみて、この船は日英交換船ではなく（日英間交換船は一九四二年八月一〇日横浜出港の鎌倉丸が最後）、日米居留民交換船（一九四二年に続く第二次交換）で、米国側が手配したスウェーデン船籍・グリップ・ホルム号である。日米両側の船名、航海日程などは以下のとおりである。

日本側

船名：帝亜丸（日本郵船、元フランス船籍「アラミス」）

運航日程

☭一九四三年九月一四日：横浜出港→大阪寄港→上海寄港→香港寄港→サンフェルナンド（フィリピンの港湾）寄港→サイゴン寄港

☭一九四三年一〇月一五日：ポルトガル領ゴア（インド半島西海岸の港湾）入港

☭一九四三年一〇月二一日：ゴア出港

☭一九四三年一〇月三一日：昭南（シンガポール）入港

☭一九四三年一一月二日：昭南出港→マニラ寄港

☭一九四三年一一月一四日：横浜帰港

アメリカ側

船名：グリップス・ホルム号

運航日程

☭一九四三年九月二日：ニューヨーク出港

☭一九四三年九月一七日：リオ・デ・ジャネイロ入港

☭一九四三年九月一八日：同港出港

☭一九四三年九月二二日：モンテビデオ（南米中南部の国ウルグアイの首都）入港

☭一九四三年九月二三日：モンテビデオ出港

☭一九四三年一〇月四日：南アフリカ連邦、ポート・エリザベス入港

☭一九四三年一〇月一六日：ゴア入港

☭一九四三年一〇月二一日：ゴア出港

（以上の運行日程はWikipediaの資料による）

右の航程から、伊号八潜水艦が遭遇したグリップス・ホルム号は、ゴアを出港し、インド洋、喜望峰を経由して、大西洋から米国に向かう途中であったことが推定できる。伊八艇は、遭遇直後には同船を敵艦と見て魚雷攻撃を行うこととなり様子を伺っていた。しかし夜になって同船に接近し攻撃に備えた際に、その舷側に十字形の標識があることを発見し、急遽攻撃を中止した。このように、戦時中の交換船の航行は、撃沈などの危険を常に背負いながらのものであったことが分かる。

（3）ミス・L・E・リーと交換船

訳註（97ページ（15）や補遺（113ページ　4）でその文章を引用させていただいた、松蔭女子学院の教師であったレオノラ・エディス・リー氏は、イギリス人であるが、父の勤務の関係でカナダに生まれ、後SPG所属の宣教師となり日本に派遣された。太平洋戦争勃発後も、彼女は日本に留まることが宣教師としての任務であるとの判断から離日に消極的であった。しかし当時の神戸教区主教八代斌助師は、「敵性外国人」としての宣教師が、日本に留まることの危険性への配慮などからリー氏に帰国を勧め同氏もそれに従うことにした。イギリス人である彼女は、当然、日英交換船に乗る条件を備えているとの判断から、一九四二年夏に出帆の交換船への乗船申請をした。しかし、その事務を担当していたスイス領事館の担当者は、彼女がカナダ生まれであるとの理由で申請を却下した。中立国国籍者を含む帰国希望者が多数あり、乗船者を制限するためであった。彼女は鎌倉丸で帰国する英国人たちを神戸駅で辛い思いで見送った。以上の経緯から、同氏は、一九四三年の第二次日米交換船への乗船を希望し申請を行ったが、今度は彼女がイギリス国籍であるとの理由から出港三日前に申請却下の通知を受けたのである。（リー氏著「戦中覚書」『松蔭女子学院史料第８集　２００８年』所収による）

いわば着の身着のままで滞日を余儀なくされたリー氏の困難は想像に余りあるが、そのことにより、外国人による透徹した目で戦時下の日本聖公会の姿が捉えられることになったのである。また大戦下の厳しい状況下で事にあたる八代主教への同氏の堅く深い信頼は終始揺らぐことがなかった。

5．シェフィールド主教座大聖堂・ヘーズレット主教記念タブレットの献納式について

（114ページ　補遺６）

シェフィールド教区の聖ペトロ・聖パウロ主教座大聖堂でのヘーズレット主教記念タブレットの献納式は、シェフィールド教区主教・ハンター（I. S.

Hunter）師の主唱により、一九五七年一二月七日（土）正午から、ロチェスター教区補佐主教マン（J. G. Mann）師による除幕で行われた。この式典には、当時ケラム神学校で研修中であった、日本聖公会の内田稔、与賀田千秋両司祭が招かれ参列した。マン主教は戦前、ヘーズレット主教と同時期に九州地方部の主教であり、戦後の日本聖公会復興調査委員の一員としてヘーズレット主教と共に来日した経緯がある。なお、日本からこの記念タブレットのために四〇ポンドの献金が捧げられた。（内田稔氏提供による「CHURCH TIMES」〈イギリス聖公会の週刊機関誌〉の記事による）

6．佐々木鎮次主教の獄中記とヘーズレット主教の説教

太平洋戦争末期に、東京教区主教佐々木鎮次師は、当時の国策であった、日本聖公会の日本基督教団への合同に反対したために、東京九段の憲兵隊司令部に拘禁され尋問を受けた。その上で、「治安警察法」違反として巣鴨拘置所に抑留され取調べを受けた。

（一九四五年
二月一九日より三月三一日迄
第一回憲兵隊取調べ
五月一四日より六月一四日迄
第二回取調べ
六月七日より同一六日迄
巣鴨拘置所での取調べ
六月一七日不起訴　釈放）。

同師の獄中回顧録によれば、右記第一回憲兵隊取調事項は左の諸事項であった。

「1　日本聖公会再建計画
2　戦争観
3　宿谷の話　北京関係（引用者註「宿谷」は日本聖公会執事・宿谷栄師の事である。西村敬太郎編『日本聖公会の試練、嵐の跡を顧りみて』に次の記述がある。「昭和二十年二月二日、松本文、宿谷栄の両聖職（日本聖公会執事）が、九段の憲兵隊司令部に拘束された。（中略）宿谷執事は教務で、佐々木総裁から北支に遣わされた者として、佐々木主教の密謀（これが嫌疑）を探るため、松本執事は宿谷師の友人として、その間の動静の傍証を得るため、と思われた。」日本聖徒アンデレ同胞会東京聖三一教会支部発行『日本聖公会の試練』より再引用）
4　ヘーズレット講話」

右の内、4に関する「取調べの内容」として次の記述

がある。

「四．ヘーズレット講話の要旨と之に対する当時の感想

十八年六月三十日英国セントポール大聖堂にてヘーズレット説教し末尾に〔「日本住民生活力旺盛なりかゝる故凡ての部面に行過ぎあり宗教も同じ　斯る国民は戦後再教育の要あり而してその手〔が〕かりとなるものはクリスチアンなり」

と予はヘーズレットの如き我国を愛して之を知れるものがその結果を苦しむものは直ちに日本聖公会なるを知らむ如何にして斯る言を為せしか怪むと感ぜり　と言ふに対し之が英国人の真意なり何故国民として憤激を感ぜられしぞ之れ日本精神を□失へ〔る〕為なりと断定す」

（『キリストのかおりを　目白聖公会八十年記念誌』目白聖公会　一九九八年一〇月発行より引用）

この獄中記は、メモなどが一切許されなかった取調べ事項に関して、釈放後、終戦前の一九四五年七月四日までに日記帳に綴られた由である。ヘーズレット主教が行ったとされる説教の内容や真意は確認できず、また引用メモの特に最後の部分は、文脈上、意味不明の面もあるが、英国帰国後のヘーズレット主教の言動と、日本におけるその波紋を伝えるものとして注目したい。

なお取調べ中の昏倒や、釈放後の極度の憔悴の様子などから、佐々木主教への取調べは苛烈なものであったことが窺える。

以上